

東洋陶磁学会第 44 回大会

研究発表要旨

「日本磁器の創始と発展—江戸前期を中心に—」

平成 28 年 10 月 29 日・30 日・31 日

佐賀県立九州陶磁文化館

< 記念講演 >

日本磁器の創始と発展（概論） 鈴田 由紀夫

< 研究発表 >

肥前の磁器の始まりの実態（初期伊万里） 村上 伸之
肥前磁器の流通について—17 世紀前半の出土資料を中心に—

..... 渡辺芳郎・野上建紀・赤松和佳・畑中英二・水本和美・滝川重徳・
庄田知充・新宅輝久・藤掛泰尚・河合 修・小野田恵・佐藤雄生

色絵磁器の始まりの実態（初期色絵）

—山辺田遺跡調査成果を中心に— 大橋 康二

柿右衛門様式の実態 家田 淳一

柿右衛門様式色絵の消費地での出土状況 堀内 秀樹

鍋島焼の始まりから盛期に至る実態

—日峯社下窯跡の調査成果を中心に— 船井 向洋

鍋島焼の消費地での出土状況（草創期～盛期鍋島） 水本 和美

東 洋 陶 磁 学 会

共催：佐賀県立九州陶磁文化館・有田町教育委員会・近世陶磁研究会

日本磁器の創始と発展（概論）

鈴田 由紀夫

2016年の今年、有田焼が創業されて400年目の記念の年とされている。これは陶祖李参平こと金ヶ江三兵衛が有田に入った元和2年（1616）を起点としている。一般的には李参平が同年に泉山の陶石を発見し、日本最初の磁器を作ったというように説明されることが多い。この従来語られてきた省略的な歴史観は、学術的な研究で様々な実態が明らかになり、事実即した陶磁史に修正されてきた。そうした見解を基に歴史理解を深めてゆくと、当時の状況が見えてくるにつれて新たな疑問も生じてくる。今回の大会では私の素朴な疑問が、最新の研究成果の発表でいくつも氷解することを期待している。

有田焼創業400年に際しての各種取材のなかで、「400年も何故続けることが出来たのか」という質問が多い。これに対しては需要がなければ産業として成立しないだろうという考えから、磁器を求める人々を満足させるためそれぞれの時代に努力し続けたからでは、と答えるようにしている。有田や肥前で磁器の創業がなされる頃、国内には多くの中国磁器が輸入されており、大きな需要があったのは明らかである。しかし産業として起業するには技術と原料が不可欠であり、朝鮮陶工の技術を基本に中国の技術や意匠を取り入れながら肥前の磁器生産が発展していった。

韓国や中国、肥前の窯跡の発掘調査などから、当時の技術的な比較検討がなされているが、窯構造や窯道具、成形技術、陶石の精製、釉薬の違い、ハ

リ支えの存在などについては、すべて海外からの技術導入によって達成されたとは言い難い。日本の陶石の特性を生かし、地元の材料を活用して進化していったと考えられる。生産に外国人が多数関わるという意味では今日より国際的であるが、朝鮮陶工の他有田では高原五郎七（高原市左衛門尉）や初代酒井田柿右衛門等日本人陶工の係わりもあり、初期においては多くの人的な交流の中から窯業が進展したとみられる。

磁器の創始と発展について個人的にはよく理解できていないテーマが多くあるが、箇条書きにしてみると次のようなものである。唐津焼技術と肥前磁器の影響関係、朝鮮陶工と日本人陶工の比率及び同化の過程、中国人技術者の来有の可能性、山辺田窯色絵と柿右衛門色絵の関係、ハリ支えの開発経緯、素焼きの必然性と出現時期、柞灰に到達した理由と利用開始時期、中国意匠写しの変容と和様化の具体例、伊万里焼名称の興りと対象物、1650年代以前の御道具注文、承応式歳銘と元禄柿銘の制作理由、17・18世紀における天草陶石使用の実態、肥前磁器技術の伝播の実態、磁器産地における各藩の経済効果、江戸期を通じて中国銘を記し続けた理由、京都と肥前の生産者意識の違い、等々。これらは今回の各発表テーマに必ずしも即したもののばかりではないが、講演では私の関心事について触れながら、大会テーマの諸問題に繋がればと思っている。

肥前の磁器の始まりの実態（初期伊万里）

村上伸之

肥前の近世窯業では、「唐津焼」と総称された陶器と、「伊万里焼」と総称された磁器が、車の両輪のように並行して生産されており、肥前全体としては一通りの製品を供給できる、いわば肥前窯業圏を形成していた。

こうした肥前の陶器と磁器は、一見すると、まるで姿形が異なっているが、実際には共通した技術基盤上に位置するものであり、ともに朝鮮半島の李朝時代の技術に基づいている。つまり、まったく窯業の基盤を持たなかった地域に、陶工の移動という形で完成された生産技術が導入されることにより、既存の国内窯業の技術とは一切関わりを持たずに、新たな窯業地が形成されたのである。

おそらく1580年代後半頃に、岸岳（唐津市）の丘陵に登り窯が築かれたことによって成立した肥前の近世窯業は、その後、文禄・慶長の役（1592～98）を契機として生産地としての規模を拡大した。当時は陶器のみが生産されていたが、生産地域の拡散に伴い1600年代には有田でも窯業がはじまり、1610年代中頃には、ここで日本初の磁器が誕生したのである。

磁器は従来の陶器窯の中で、陶器に追加される形で、突如として焼成がはじまった。しかも、同一の登り窯の同一の焼成室で、同じ窯道具類を供用する形で焼成されている。つまり、肥前において陶器窯と磁器窯という区別は、単なる焼成している製品の違いに過ぎず、窯体構造自体に差があるわけではない。

肥前における陶器と磁器の違いとは、単純な胎土の質的な差ではなく、用いられる技術差に起因している。陶器の場合は、李朝の技術で、日本の消費者の生活や慣習、好みなどに適応させたもので、一般的な碗・皿類などは主に李朝の中・下級の白磁の技術を源流としている。一方、磁器の方は、基盤となる技術は陶器と共通しているが、そこに中国風磁器を目指す上で不足する技術を、補完的に中国から取り入れて完成したものである。そのため、消費者に見える製品自体は染付を基本とする中国風ながら、生産の現場では陶器と同じ李朝風の技術が貫かれている。そうした意味では、現在一般的に認識されている日本磁器のはじまりとは、中国風磁器の成立のことを指しており、それ以前から生産されていた無文を基本とする李朝白磁を源流とするものは、今日では唐津焼として陶器に分類されている。

有田の窯場は、当初町の西部を主体に分布しており、磁器も窯場近辺の原料を使用していたものと推測される。しかし、原料枯渇の懸念により方々探索が行われ、おそらく1630年前後頃に泉山で豊富で良質な原料が発見された。これにより将来に渡る原料的な懸念が解消し、まずは天狗谷に窯が開かれ、泉山の原料を使った磁器専焼体制が模索された。その結実として、1637年に窯場の整理・統合が行われ、今日に継承される産業的磁器専業体制の基盤が構築されたのである。

肥前磁器の流通について—17世紀前半の出土資料を中心に—

渡辺芳郎・野上建紀・赤松和佳・畑中英二・水本和美・滝川重徳
・庄田知充・新宅輝久・藤掛泰尚・河合修・小野田恵・佐藤雄生

1610年代、肥前地方（現佐賀・長崎県）に始まった磁器生産は、それまで主として中国からの輸入に頼っていた磁器の国内生産の開始という点で、日本の陶磁史上における大きな画期になる。それではその国産磁器は、国内における陶磁器流通のあり方、そしてそれを使用場面における陶磁器組成にどのような影響を与えたのか。本発表では、17世紀前半代の考古学資料を中心に検討することで、その具体的様相を全国規模で整理することが目的である。

今回の検討結果をまとめると以下ようになる。

(1) 最古段階（1610年代）の肥前磁器の流通範囲については、その製品の抽出が困難であることから明らかではないが、生産地の磁器創始年代と遠隔地に一定量流通する年代の間には差がある可能性がある。

(2) 1610～30年代の肥前磁器は日本各地に流通していたことが出土資料から知られるが、本格

的な流通は1630～40年代を待たねばならず、これは1637年の窯場の統廃合による肥前磁器の生産増大を背景とすると考えられる。

(3) 肥前磁器の本格流通には流通ルートによる地域的な時期差や、調査地点の性格と居住者による所有率の差異が見られる。

(4) 17世紀前半の肥前磁器は、中国磁器の代替という側面もあるが、すでに流通していた陶器（肥前陶器・瀬戸美濃陶器・在地産陶器など）のシェアを奪う形で進行している側面もある。

(5) 肥前磁器が主体とする食器におけるシェアの拡大は、単純に中国磁器との関係でのみとらえるべきではなく、国産陶器・土師器・木器・漆器との関係もあわせて検討すべきである。

なお17世紀前半の一括資料はけっして多いとは言えず、地域的にも偏りがある。それゆえその理解にあたっては、今後の資料の増加を待つ部分も多いことを断っておきたい。

色絵磁器の始まりの実態（初期色絵）—山辺田遺跡調査成果を中心に—

大橋 康二

日本の色絵磁器は酒井田柿右衛門家に伝わる記録から1647年頃、製作に成功したと考えられてきた。この草創期の色絵磁器（の素地）を焼いた重要な窯場として、山辺田窯跡（国史跡）が早くから推定されてきた。

実際、有田ではすでに山辺田窯をはじめ、猿川窯など1640～50年代と考えられる窯跡、もしくは窯跡周辺で色絵磁器片が出土した。そのような資料

と消費地遺跡の出土資料などをもとに1640年代後半から1660年代にかけての有田の色絵初期の変遷を、すでに考察してきた。

しかし、重要な課題として、その色絵を製作、そして焼いた赤絵窯の場所は発見されていなかった。ところが、1998年頃から山辺田窯の隣接地の発掘調査が行われ、特に2013年からの発掘調査で多量の色絵磁器片と赤絵窯の窯壁片、窯道具、製作道具

など多量の色絵製作関連遺物が出土した。それらは1640年代後半から50年代にかけてとみられる。壊されているが、赤絵窯の場所も確認できた。近年

の発掘調査結果から、有田、すなわち日本の色絵磁器創始期の製作技術、及び製品の特徴、赤絵窯の立地等の解明を行う。

柿右衛門様式の実態

家 田 淳 一

「柿右衛門様式」は、「柿右衛門」作品をより客観的に把握しようとしてきた中で使われるようになった概念である。

「柿右衛門」は、江戸時代、1713年刊行の『和漢三才図会』で紹介されるなど、細工の巧みな製作者として知られていた。伊万里と呼ばれた肥前磁器の中で製作者が産地佐賀、有田だけでなく、江戸や大坂を中心に国内で知られていた極めて珍しい存在であった。

近代になり、「柿右衛門」は鍋島とともに肥前磁器を代表する一つとして評価され、その陶磁器としての特徴を明らかにする研究が盛んになった。代表的なものは1916年、大河内正敏を中心とする彩壺会の『柿右衛門と色鍋島』で、酒井田柿右衛門家の製作した作品としての特徴が編年的に明らかにされた。この研究は「柿右衛門」の認識について、その後長く影響を持つことになる。

戦後になり、永竹威は「柿右衛門」を「柿右衛門様式」として把握しようとした。永竹の「柿右衛門様式」は酒井田家のある「南川原一帯の窯場」に共通する様式とするもので、「柿右衛門直系」と傍系の「柿右衛門手」の二つに分類した。南川原という窯場を単位として様式をとらえようとした点は、近年の研究成果につながる視点といえる。しかし、当時の限られた資料からは、それ以上の展開は制限されたといわざるを得ない。その後、1970～80年代にかけてヨーロッパ伝世の柿右衛門様式作品などの研究や考古学的な発掘調査による豊富な資

料が蓄積された結果、「柿右衛門様式」自体を酒井田柿右衛門家または南川原という一窯場の製品に留めるのではなく、有田皿山全体で生産された様式の一つとする考えがでてきた。

これに対し、同じく有田の古窯跡調査が計画的に進められた結果、有田全体の窯場ごとの特徴がより詳しくわかったことから、酒井田家に関わったとされる南川原地区の窯跡の特徴もより鮮明になってきた。また、1995年から1999年まで柿右衛門様式総合調査事業が行われ酒井田家伝世の土型や柿右衛門古窯出土の染付陶片の文様などが公に報告され、この成果を基にした展覧会も開かれ、「柿右衛門様式」を酒井田家に関わった典型作とその影響のもとに作られた広義に分ける分類が提起された¹。また、土型から想定される作品も展示され歴代柿右衛門窯作品が一部ではあるが具体的に明らかにされた。その後九州産業大学の柿右衛門様式陶芸研究センターが発足し、国内やヨーロッパ伝世資料などの総合調査が実施されたのを始め、「柿右衛門様式」の総合的な研究が進められた。またこの他にも典型的な柿右衛門様式をはじめ、その前後の作品変遷を具体的に把握しようとする研究が各研究者によって行われている。

今回の発表は、以上の研究史を振り返り、文献資料や土型などから江戸時代における酒井田家の時代的な特徴や作品を推定することにより、「柿右衛門」及び「柿右衛門様式」の特徴を考察することとしたい。

¹ 『柿右衛門様式総合調査事業報告書』1999年3月
佐賀県立九州陶磁文化館
本事業は、大橋康二氏の主導で1995年度から始めら

れ、1999年度までの4年事業で行われた。
『柿右衛門—その様式の全容—』1999年10月
佐賀県立九州陶磁文化館

柿右衛門様式色絵の消費地での出土状況

堀内 秀樹

陶磁器を評価するにあたっては、製品の消費動向は欠くことのできない視点と考えている。窯業が産業として位置づけた場合、製品を購入する消費地や消費階層を意識して生産器種、量、質などを選択しているはずであり、考古学的調査による分布状況一どのような製品が、いつ、どこから出土するのか？—は、窯や製品の性格を明らかにする上で、重要な材料となりうる。

また、消費地で行われた形状、法量、数量、色調、質などの需要・選択は、その指向が例外的なものから普遍化するにしたがって、地域や階層の共通の出土様相となって現れる。そしてその需要の背景には消費地において行われた社会的、経済的、文化的活動が反映していると考えられる。

柿右衛門様式の色絵磁器は、ヨーロッパの宮殿や城館あるいは博物館・美術館に多く伝世しており、また、オランダ東インド会社の記録からも1670～80年代に色絵磁器の輸出が確認され、ヨーロッパがその市場の一つであったことは明確である。一方、現時点で発掘調査によって確認された製品はわずかである。このことは一見矛盾しているように思えるが、柿右衛門様式の色絵磁器の生産量、

需要の偏在性、破損の頻度などと照射して考えてみると、需要の所在がより明確になったと考えている。さらに海外では色絵製品が注目されるが、色絵製品と同じ器形や文様の染付製品も多く伝世しており、需要が色絵だけではなかったと判断できる。

日本国内においても1670～90年代を中心とした有田南川原産と推定される染付や色絵磁器が、江戸の大名屋敷を中心に出土されることから、これらが国内で需要・消費されていたことは間違えない。こうした中に色絵磁器が確認できるとは言え、染付に比較すると量は少ない。江戸での出土は武家儀礼用と推定される同規格の揃いの製品で構成される一括資料中に含まれている例が多く、需要の主体は上級武家にあつたと思われる。色絵は江戸以外では、金沢、名古屋、大坂、徳島、長崎などから出土しているにすぎない。

しかし、近代の陶磁器の売立目録の調査では、多数の色絵柿右衛門様式が確認されることから、国内にも多くが伝世していたことも推定できる。

出土資料では、柿右衛門様式の識別が問題となる場合も多く、このあたりを含めて報告したい。

鍋島焼の始まりから盛期に至る実態

一日峯社下窯跡の調査成果を中心に—

船井 向洋

鍋島焼は、佐賀藩が将軍家への献上や幕府の要人への贈答用として作り出した磁器製品であり、その製作は、採算を度外視して行った特別詔えの焼物である。一般的に良く知られている鍋島焼は、円熟された盛期鍋島のものが多いが、その前段階

である初期鍋島は、盛期鍋島とは趣の違う製品である。

最初の献上品は、有田の岩谷川内（現有田町）で製作していたが、その後、大川内山（現伊万里市）へと移転している。その理由として、佐賀藩は、民

窯とは別格の御道具山を有田から切り離すためと思われる。

大川内山での最初の献上品の焼成は、日峯社下（にっぽうしゃした）窯跡で行われていたことが発掘により確認されている。伊万里市教育委員会では、日峯社下窯跡の発掘調査を平成元年（1989）から行っており、昨年度までで4回の発掘調査を行っている。（今年度も発掘調査を実施する予定である。）この岩谷川内から大川内山への移転について、近年の発掘調査によって新たに得られた知見や出土遺物を中心に考察したい。

岩谷川内製品と大川内山製品の一般的な違いは、岩谷川内製品は、高台が低く、高台文様も裏文様も描かれておらず、色絵が寒色系などで、糸切り細工成形のことが多い。大川内山製品は、高台が高く、高台文様が施されており、また、裏文様は唐花唐草文などを規則的に配置している。色絵部分は染付や赤の輪郭線を使い、明るい赤、黄、黄緑を使っており、糸切り細工成形の多いとされている。

このような特徴によって区分は可能であるが、発掘調査による出土陶片と伝世品を比較すると岩谷川内製品と大川内山製品の両方の特徴を持つも

のが確認できる。このことは両者の関係性の近さを表すものと言えるが、同時に、伝世品や消費地で出土する初期鍋島の生産地同定を難しいものとしている。

江戸城跡汐見多聞櫓台石垣地点の発掘調査で明暦3年（1657）の火災に伴う初期鍋島が多量に出土しており、被災した製品と岩谷川内に所在する猿川窯跡、長吉谷窯跡の出土陶片と大川内山の日峯社下窯跡から出土した陶片の比較検討により関係性の強さを確認することができ、また、伝世品と日峯社下窯跡出土陶片を詳細に比較検討し、その差異から、新旧関係や製作状況を読み取ることができる。

さらに、猿川窯跡における色絵素地と、日峯社下窯跡における色絵素地の在り方の比較や、日峯社下窯跡での初期鍋島の廃棄状況を検討し、佐賀藩の管理運営体制なども考察する。

見学会では、平成26年度以降の発掘調査で出土した、新たな初期鍋島陶片の提示と日峯社下窯跡の発掘調査状況（物原の調査を予定）の見学を予定している。

鍋島焼の消費地での出土状況（草創期～盛期鍋島）

水本和美

将軍家への献上と大名家への贈与のため、鍋島藩の御用窯（いわば藩窯）で焼かせた鍋島。その素地の白さ、文様意匠の卓越性、成形・絵付け・彩色の材料・技法の秀逸さにおいて他の焼きものと一線を画す。鍋島を端的に表現するなら、このようなところか。しかし、仔細にみれば、その製作システム、デザイン（形・文様・彩色）とこれを支える技術、仕上げた製品の行き先、については変容している。

1990年代、日峯社下窯の発掘調査が行われ、初期の藩窯についての議論が活発化した。これと相前後する1992年、前山博氏が『鍋島藩御用陶器の

献上・贈与について』を著し、鍋島の贈献の論理がより詳細に解明された。1980年代～1990年代には江戸遺跡の鍋島出土陶片によって、それまで古陶磁愛好家や美術史研究者によって伝世品や表採品、あるいは、窯跡調査とその出土陶片を中心に進められてきた、鍋島研究に新たな機軸が加わった。その大橋康二氏、仲野泰裕氏らによって行われるようになった消費地遺跡における鍋島の出土に着目した言及に、筆者も加わることとなった（水本1998「消費地遺跡出土の鍋島」）。そして、最近では、成瀬晃司氏が「江戸遺跡出土の鍋島」において消費地の動向を提示した。

さて、鍋島の先のイメージは、延宝 - 元禄期頃（17 世紀後葉 - 18 世紀前葉）の最盛期のもので、前後の 17 世紀中葉と 18 世紀後半には少し違う顔を見せる。初期の藩窯は大川内山にはなく、有田内山の岩谷川内窯・外山の南川原窯・日峯社下窯のいずれかあるいは順を追って移動しとされる。また、18 世紀後半から 19 世紀代中葉の後期鍋島は将軍家・大名家のみならず、町屋での志向を考慮する必要もある。大橋康二氏は、「鍋島の編年についての考え方」や『将軍と鍋島・柿右衛門』において出土資料に基づく仔細な年代観を提示し、かつ、その出土地の大筋の整理を行った。小木一良氏の一連の研究でも最近のものでは、考古学研究と相互に関連し、筆者の示した町人地出土鍋島との関連を想起させる。

消費地遺跡出土の鍋島をみると、前山博氏の示した①将軍家への献上、幕閣を中心とした大名家・

武家への贈与といった論理を、確かに確認できる。しかし前山氏の指摘の裏付けのみではなく、②身分・階層や時代を広範に確認できる点、③具体的な製品を出土地とともに検討できる点、④同時に存在する中国磁器や肥前磁器の動向についても確認できる点、⑤有田や伊万里の窯跡出土陶片とも比較できる点、など出土陶片ならではの利点がある。今回、江戸遺跡の成果を中心として具体的な陶片を使い、特に、(1)「江戸城跡出土明暦大火罹災一括資料」中の陶片資料、(2)譜代大名の屋敷地のいわば高級食器セットにみる 1657 年直前の大名家の志向と肥前磁器の生産動向との関連、(3)新宿区などで、享保期頃の盛期鍋島がどのような身分・階層に需要され、具体的な製品はどのようなものか、(4)中央区における武家の需要などにも注目して報告を行いたい。

東洋陶磁学会：

〒102-0074 東京都千代田区九段南 1-5-6 りそな九段ビル 5F KS フロア
TEL./FAX. 03-3239-1277 <http://toyotoji.com/>
